平成２２年度企画事業

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

大学生は、小学生を集めて実施した「子どもむかし生活体験村」において、自分たちが学んだ愛媛の伝承文化を上手く伝えることができました。そして、地域に根ざして活動しようとするリーダーとして成長しました。

１．事業実施までの経緯

本事業は、当所でのこれまでの体験活動が自然体験活動中心であったことや日本では自然と生活文化が一体化していると思われること、今日日本の伝承文化を理解し、それを継承していこうとする意識が希薄化していること等から「自然と文化の融合体験」および、それを通した地域に根ざして活動する「リーダー養成」を目的として、平成１９年度より国立大学法人愛媛大学との共催事業として実施している。

４回目となる今年度は、前年度までの課題であった大学生の参加を増やすべく、国立大学法人愛媛大学との連携を強化した。前年度末より打ち合わせを重ねた結果、大学生がより参加しやすい事業とするため、実施時期を例年より１週間程度遅くした。また、事業内容を早期から決定し、大学生への広報に力を注ぎ、その参加を促した。

今年度は、昨年度までの小学校５・６年生に加え、新たに小学校４年生も参加対象とした。これは、近年の子どもたちがあまり経験したことのない幅広い異年齢集団での生活、遊びを新たにテーマとして設定したためである。

プログラム内容については、昔の農村の周辺に生息し、人々の生活の道具としても利用されていた「竹」を扱ったプログラムを多く配置した。「竹とんぼ作り」や「竹箸作り」などがこれに該当する。

以上の点を考慮しながら、国立大学法人愛媛大学を始め、他の関係機関と連携しながら、今年度の事業を進めた。

２．ね　ら　い

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験の融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」の運営を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

３．主　　催

独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立大洲青少年交流の家
国立大学法人　愛媛大学

４．後　　援

［後援］愛媛県教育委員会　西予市教育委員会
［協力］西予市野村町惣川「土居家」

５．期　　日

平成２２年８月２３日（月）～２７日（金）
（子どもむかし生活体験村は８月２５日（水）～２７日（金））

６．場　　所

国立大洲青少年交流の家（２３日（月））
西予市野村町惣川「土居家」（２４日（火）～２７日（金））

７．募集人数　大学生１３名（募集人数１５名）
（子どもむかし生活体験村　小学校４～６年生２０名（募集人数２０名））

８．講　　師

大本敬久氏（愛媛県歴史文化博物館専門学芸員）
犬伏武彦氏（松山東雲短期大学特任教授）
清水浩氏・清水淳子氏（国際竹とんぼ協会会員）
岩本康孝氏（大洲市立大洲小学校教諭）
西予市野村町惣川地区の方々
山﨑哲司氏（愛媛大学教育学部教授）・日野克博氏（愛媛大学教育学部准教授）
国立大洲青少年交流の家担当職員

９．日　　程

8/23（月）	9:30	10:00	10:30	12:00	13:00	14:00	15:00	17:00	18:00	19:30	20:30		
	受付	開講式	アイスブレイク	昼食	現代の教育	体験活動の意義と方法	うちわ作り実習	子どもとのかかわり方	夕食 入浴	リーダーについて	情報交換会		
8/24（火）	9:00	10:30	12:30	13:30	16:00	18:00	19:30						
	土居家へ移動	愛媛の民俗文化について	昼食	竹とんぼ作り実習（安全管理）	リーダーズプログラム立案「子どもむかし生活体験村」運営準備	夕食 入浴	リーダーズプログラム立案「子どもむかし生活体験村」運営準備						
8/25（水）	8:30	10:30	11:00	12:00	13:00	15:00	17:30	19:30					
	『むら探検』現地下見	開村式	なかまづくりゲーム	昼食	土居家探検	うちわ作り	夕食 入浴	リーダーズプログラム発表					
8/26（木）	9:00	16:00	18:00	20:00	21:00								
	リーダーズプログラム①（『むら探検』、『むかし遊び』他）	竹とんぼ作り	夕食 入浴	リーダーズプログラム②（『きもだめし』）	ふりかえり								
8/27（金）	9:00	11:30	12:00	14:00	15:00	16:30							
	うどん作り竹箸作り	閉村式	小学生帰所 大学生片付け	ふりかえり	閉講式	大学生帰所	解散						

10. 活動内容

〈第１日（８月２３日（月））〉国立大洲青少年交流の家

「アイスブレイク」　国立大洲青少年交流の家職員（１０：３０～１２：００）

参加した大学生１３名の緊張をほぐすことを目的として、アイスブレイクを行った。さまざまな活動を行う中で、自然に笑いが生まれ、参加者同士の距離が徐々に縮まっていった。同時に、２５日（水）から始まる「子どもむかし生活体験村」で、小学生に「なかまづくりゲーム」を実施できるようにするためのスキルを身につけることもできた。

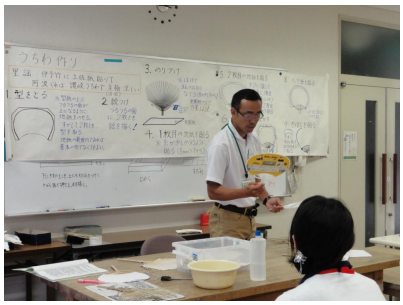
「現代の教育」　国立大学法人愛媛大学　山﨑哲司氏（１３：００～１４：００）

愛媛大学の山﨑哲司氏が、教育現場の現状や求められる教員像についての講義を行った。その中で、学校現場では、団塊の世代の大量退職等により、「即戦力」が求められているという話があった。そして、これから教員を目指す大学生には、教育的愛情を持って児童・生徒と接することができるとともに、多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切に行動できるよう、その資質を高めて欲しいとのアドバイスがあった。将来、子どもとかかわる仕事に就きたいと考えている大学生たちは、真剣な表情で山﨑氏の講義に聴き入り、その決意を強くしている様子であった。

「体験活動の意義と方法」　国立大洲青少年交流の家職員（１４：００～１５：００）

国立大洲青少年交流の家次長が、体験活動の重要性についての講義を行った。その中で、現代を生きる青少年の課題を引き起こした原因の１つに体験活動の不足が挙げられるとの指摘があった。その後、統計を用いながら、体験活動の意義を説いた。そして、これからの指導者には、子どもの育ちにとって重要な体験活動の意義をよく理解し、それを実践していって欲しいとの願いが述べられた。大学生にとっては、小学生に体験活動を教える意味づけができた貴重な時間となった。

「うちわ作り実習」　国立大洲青少年交流の家職員（１５：００～１７：００）



今回のテーマである「竹」を扱ったプログラムの１つである。「子どもむかし生活体験村」で小学生に直接指導できるようにすることを目的に、この「うちわ作り実習」を大学生に実施した。地紙に絵を描き、のり付けをした後、竹の穂骨に貼り付ける。のりが乾いたら地紙を好みの形にし、へり紙やぎぼしをのり付けして完成となる。参加者は、それぞれオリジナルのうちわの制作を楽しむことができていた。また、小学生に直接指導する手応えをつかんでいる様子でもあった。

「子どもとのかかわり方」　大洲市立大洲小学校　岩本康孝氏（１７：００～１８：００）

大学生が小学生を迎える前に、子どもとのかかわり方について学び、その不安を解消するという目的で、今年度新しく導入したプログラムである。大洲小の岩本氏から、「現代の子どもたちの特徴」や「集団作り」、「子どもとのかかわり方」についての話があった。子どものほめ方や叱り方、学級集団をまとめるためのルール作りの方法など、自身の経験に基づいた実践的な内容の講義であった。大学生にとっては、実際の教育現場で活躍している先生の話を聞く貴重な機会となった。

「リーダーについて」　国立大学法人愛媛大学　日野克博氏（１９：３０～２０：３０）

愛媛大学の日野氏がリーダーについての講義を行った。その中で日野氏は、リーダーの条件として「状況の判断を伴った意思決定ができること」「(子どもたちに）よい見本をみせることができること」「たい力（体力、耐力、対力、帯力、態力、待力）があること)」を挙げた。地域に根ざしたリーダーとして活躍することを目標としている大学生は、「自分の理想のリーダー像」について改めて考え直すことができた。

〈第２日（８月２４日（火))〉西予市野村町惣川『土居家』

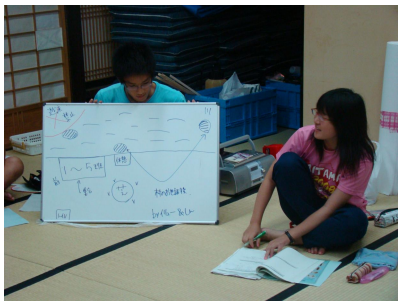
「愛媛の民俗文化について」　愛媛県歴史文化博物館　大本敬久氏（１０：３０～１２：００）

愛媛県歴史文化博物館の大本氏が、愛媛の民俗文化についての講義を行った。愛媛県内でも特に『土居家』がある惣川地区の民俗文化についての紹介があった。大本氏は、地域の民俗文化について、「学ぶこと・注目することが、文化の伝承につながる。」と述べ、民俗文化を学ぶことの意義を強調した。大学生は、愛媛の文化の伝承者になるという決意を新たにすることができた。

「竹とんぼ作り実習」　国際竹とんぼ協会　清水浩氏・清水淳子氏（１３：３０～１６：００）

「竹」を扱ったプログラムの１つとして、国際竹とんぼ協会の清水氏の指導のもと、竹とんぼ作りの実習を行った。大学生は竹とんぼ作りの方法だけでなく、刃物の使い方等、安全管理についても詳しく学んだ。大学生は真摯に実習に取り組み、小学生にその技術を伝える手応えをつかんだ様子であった。

「リーダーズプログラム立案」「「子どもむかし生活体験村」運営準備」
（１６：００～１８：００、１９：３０～２２：００）



大学生が、翌日から小学生を迎える準備や大学生主体で実施する「リーダーズプログラム」の立案を行った。小学生が歴史的建築物である『土居家』で安全に充実した生活が送れるよう、五箇条からなる『土居家の掟』を決め、それを守るよう呼びかけることになった。また、２６日の「リーダーズプログラム①」では、『むら探検（川遊び)』『むかし遊び』を、「リーダーズプログラム②」では、『きもだめし』を実施することになり、それぞれ担当の係ごとにその運営方法についての話し合いを行った。話し合いの結果は、全員の前で発表し、広く意見を求め、共通理解を図った。「小学生だったら・・・」「あの場所に移動したら・・・」など、様々なことを想定しながら、夜遅くまで熱い議論が展開された。

〈第３日（８月２５日（水））〉西予市野村町惣川『土居家』

「『むら探検』現地下見」　（８：３０～１０：３０）

翌日の『むら探検』の現地下見を行った。西予市野村町惣川の三島神社までの道のりを実際に歩き、危険箇所のチェックをした。また、三島神社近くの河原にも足を運び、安全に川遊びを行うための監視ポイントの確認も行った。

「子どもむかし生活体験村」開始（１０：３０～）

「なかまづくりゲーム」　（１１：００～１２：００）

大学生主導で、小学生に対して実施した最初のプログラムである。最初は全員でゲームを行い、緊張していたムードを和らげた後、小学生の参加者２０名を５つに分けた班毎に協力するゲームへと展開していった。大学生が小学生を思う優しい気持ちが伝わったのか、小学生は次第に大学生に心を許すようになり、その目的を十分に達成することができた。

「土居家探検」　松山東雲短期大学　犬伏武彦氏（１３：００～１５：００）

松山東雲短期大学の犬伏氏が『土居家』の説明を行った。犬伏氏は、『土居家』の保存に尽力された方である。『土居家』の歴史やその建築構造についての話があった。参加者は、本事業で『土居家』に宿泊する意義を再確認できた様子であった。

「うちわ作り」　（１５：００～１７：３０）

大学生が小学生に教える形式で、「うちわ作り」を行った。大学生は、小学生が効率よくうちわを制作できるよう、絵付けやのり付け、乾燥などの作業をする場所を分けるという工夫をした。その工夫が功を奏し、小学生はスムーズに作業をすることができた。世界で１つだけのオリジナルのうちわを手にした小学生の嬉しそうな笑顔が印象的であった。

「リーダーズプログラム発表」　（１９：３０～２１：００）

大学生が小学生には秘密にしていた翌日の「リーダーズプログラム」の内容を発表し、それを実施するにあたっての注意事項を伝達した。小学生は翌日の盛りだくさんのプログラムを、大学生のお兄さんお姉さんや友人と一緒にできることをとても楽しみにしている様子であった。

〈第４日（８月２６日（木））〉西予市野村町惣川『土居家』および三島神社、野村少年自然の家

「リーダーズプログラム①」　（９：００～１６：００）

第４日は、大学生が主体的に内容を考えたプログラムを多く実施した。最初は『むら探検』である。途中の景色や植物を楽しみながら、安全に目的地まで移動することができた。道中の危険箇所では、大学生が子どもに注意を促した。到着後、惣川地区の方々の指導のもと、「水鉄砲作り」を行った。「竹」から作る水鉄砲を生まれて初めて手にした小学生は、「川遊び」を始めた。川遊びでは、水を掛け合う者や川の中の生物を観察する者、川周辺の景色を眺める者など、それぞれが思い思いに遊びを十分に楽しんだ。その間、大学生は危険なポイントで小学生を監視した。監視の合間に小学生とのふれあいを楽しむ大学生も多く見られた。川遊びの終了後は、小学生も大学生もその多くがずぶ濡れになっていたが、みんな充実した表情をしていた。

その後、惣川地区の方々にも協力していただき、「竹」を使って水路を作った「流しそうめん」で昼食をとった。参加者は、昼食をとりながら自然の温もりを大いに感じている様子であった。

昼食後は、三島神社の境内で『むかし遊び』を行った。このプログラムは大学生主導で実施した。大学生が提案した遊びである「花いちもんめ」「缶蹴り」「しっぽとり」、惣川地区の方々に製作していただいた「竹馬」を行った。小学生の中には遊びのルールやコツを知らない者もいたが、大学生の分かりやすい説明や優しい導きにより、自然に集団の中に入っていくことができた。小学生にとっては、学校以外の場所で、普段あまり経験することができない異年齢集団での遊びを一緒に楽しむことができたという点で、貴重な活動となった。

「竹とんぼ作り」　（１６：００～１８：００）

『土居家』に戻った後は、「竹とんぼ作り」を行った。大学生が、清水氏から学んだ技術を小学生に伝えた。竹を削る刃物を扱う場面や竹を曲げる火を使う場面については、特に細心の注意を払うように心がけた。完成後は、『土居家』の庭で「竹とんぼ飛ばし大会」を実施し、飛距離を小学生全員で競った。終了後も休憩時間に飛ばして夢中で遊んでいる小学生の姿が多く見られた。小学生にとっては、とても魅力的な遊び道具となったようである。

「リーダーズプログラム②」　（２０：００～２１：００）

大学生が主体的に内容を考えた『きもだめし』を実施した。大学生は、お化けになる係と小学生に付き添う係に分かれて、プログラムを運営した。お化けの準備が整った後、班毎に大学生に付き添われて『土居家』を出発し、近くの野村少年自然の家を目指した。途中の暗闇の中で、大学生が扮したお化けが出ると、悲鳴をあげる小学生もいた。付き添いの大学生は、小学生が暗闇の中でケガをしないよう、安全面の配慮をした。野村少年自然の家に到着後、全員で花火を楽しんだ。大学生が小学生のことを思い、一生懸命運営したことが小学生にも十分に伝わり、心に残る最後の夜となった。

「ふりかえり」　国立大学法人愛媛大学　山﨑哲司氏（２１：００～２２：３０）

愛媛大学の山﨑氏が、これまでの活動について、大学生への「ふりかえり」を実施した。このプログラムは、これまでの活動を振り返って、大学生が他の仲間たちを「・・・のプロ」と評価していく形式で行った。「叱りのプロ」や「褒めのプロ」など、さまざまな表現があった。大学生それぞれが、自分自身と他の仲間の長所を再認識するよいきっかけとなった。

〈第５日（８月２７日（金））〉西予市野村町惣川『土居家』

「うどん作り、竹箸作り」　惣川地区の方々（９：００～１１：３０）

最終日は、惣川地区の方々の指導のもと、「うどん作り」と「竹箸作り」を実施した。うどん作りでは、生地踏みや製麺機を使う作業を体験した。竹箸作りでは、惣川地区の方々が用意した竹を刃物を使って加工した。小学生は、昨日の竹とんぼ作りで刃物を使用したこともあって、前回よりも慣れた手つきであった。完成した竹箸と惣川地区の方々が製作した竹椀を使って、茹で上がったうどんを食べた。「うどん作り」と「竹箸作り」を自分自身の力でやり切った小学生は、事業前よりも逞しく成長したように感じられた。

「子どもむかし生活体験村」終了（～１２：００）

ここで「子どもむかし生活体験村」は終了し、小学生は大学生より一足先に帰宅する。閉村式では、小学生の代表者と大学生が事業を振り返っての感想を述べた。別れ際に突然、小学生から大学生にお礼の言葉と歌の披露があった。小学生から大学生への感謝の気持ちを素直に表現したこの行為に、思わず涙ぐんでしまう大学生もいた。大学生と小学生が、３日間の事業を通して、強い信頼関係を築いていたということを感じる瞬間であった。

「ふりかえり」　国立大学法人愛媛大学　山﨑哲司氏（１４：００～１４：５０）

５日間の活動を振り返っての「ふりかえり」を行った。大学生が事前に立てた目標を達成できたかどうかを自己評価した。

11. 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【小学生】

＊満足：１００．０％　＊やや満足：０．０％　＊やや不満：０．０％　＊不満：０．０％

〇この事業は楽しいだけでなく、「自分のことは自分でする」ということが大切ということが分かりました。

〇竹でいろんな物が作れるのがすごいなと思いました。

【大学生】

＊満足：１００．０％　＊やや満足：０．０％　＊やや不満：０．０％　＊不満：０．０％

〇長いようであっという間だった５日間。多くの子どもたちとふれあい、多くのことを学べました。

〇大学生が主に指導していけるものだったので非常にためになりました。

12. 成果と課題

【成果１】愛媛大学との連携が強まり、大学生の参加者が増加したこと

昨年度からの課題として、大学生の参加が少ないことがあった。今年度は、早期から愛媛大学と打ち合わせを重ねたことや早めの広報が功を奏し、愛媛大学の学生を中心に１３名の参加があった。定員の１５名にはわずかに及ばなかったが、一定の参加者を得て、地域に根ざして活動しようとする大学生を育成する機会を得たことは成果だと考えている。

【成果２】大学生がさまざまな立場から協力して小学生にかかわれたこと

小学生と寝食を共にする本事業を運営するにあたっては、参加した小学生が安定して３日間を過ごせる環境を整えることが必要となる。今年度は１３名の大学生の参加者があったこともあり、各班を担当し、直接小学生にかかわる者に加えて、「村のお世話役」という全体を見渡した活動の補助をする大学生を３名配置した。この大学生は、少し距離を置いた立場から、気持ちの余裕を持って各班の小学生と関わることができ、その役割を十分に果たした。彼らの尽力もあって、小学生は安定した感情で３日間を過ごすことができた。大学生がさまざまな角度から協力して小学生を支えられたことが良かったのではないかと考えている。

【成果３】小学生が昔の農村に住んでいた人々の生活を認識できたこと

今回は、「竹」を扱ったプログラムを多く配置した。事後アンケートで、「竹でいろんな物が作れるのがすごいなと思いました。」という感想を記述した小学生がいた。これは、小学生が本事業を通して、昔の農村に住んでいた人々の生活の道具として、「竹」が利用されていたことを身をもって知ることができたという意味で、成果であると考えている。

【成果４】ＩＫＲ（生きる力）評定用紙（簡易版）　事前事後の比較

上位能力	心理的社会的能力							徳育的能力				身体的能力		
下位能力	非依存	積極性	明朗性	交友・協調	現実肯定	視野・判断	適応行動	自己規制	自然への関心	まじめ勤勉	思いやり	日常的行動力	身体的耐性	野外技能・生活
事前	4.03	3.88	4.2	4.33	4.33	3.33	4.05	4.12	4.18	4.04	4.3	3.93	4.35	4.08
事後	4.7	4.45	4.59	4.73	4.68	4.28	4.64	4.9	4.63	4.58	4.65	4.63	4.63	4.75
差	0.67	0.57	0.39	0.4	0.35	0.95	0.59	0.78	0.45	0.54	0.35	0.7	0.28	0.67

今回の事業での体験が、小学生にどのような変化をもたらせたのかを調査するために、「ＩＫＲ（生きる力）評定用紙（簡易版）」を実施した。上記の通り、すべての項目において、事業前に比べ、事業後にその数値が向上した。今回の事業とその数値の向上の関連性を明らかにすることは難しいが、小学生がこの事業を通して、あらゆる面において自信をつけることができたと確信している。

『課題１』愛媛大学以外からも広く参加者を募ること

今回の事業では、大学生の参加者１３名のうち、１２名が共催している愛媛大学からの参加者であった。来年度は、もっと広く参加者を募れるよう広報の工夫や他大学との連携の強化を図っていきたいと考えている。

『課題２』多少のゆとりのある日程にすること

小学生が合流して以降のプログラムが、少し多くなりすぎたことも改善する必要がある。「小学生に多くの体験をさせたい」との思いからのことではあるが、結果的に各プログラムを着実にこなし、十分にふりかえる時間を確保できなかったことは、反省しなければならない。来年度は、もう少しゆとりのある日程とし、小学生に伝統文化や自然を十分に楽しませる余裕を持って事業に臨みたい。

今後は、参加した大学生の事後指導を充実させていきたいと考えている。大学生の事後の活動を把握し、地域に根ざしたリーダーとしての活動を再度促していくことがねらいである。今年度も愛媛大学と大学生のアフターケアの方策について模索し、一部実行に移しているが、更に改善していく必要があると考えている。

本事業は、講師の方々のご指導や西予市野村町惣川地区の皆さんの協力、国立大学法人愛媛大学との連携があって成り立っている。これらの方々に感謝しながら、今後もその関係を更に深め、より充実した事業になるよう、努力し続けていく決意である。